

第2回「多文化共生まちづくり会議」

議事要旨

日 時 令和8年9月8日（火） 19:00～20:30

場 所 タワーホール船堀 3階 産業振興センター

出席者 委員

菊池 哲佳 (明星大学 人文学部 国際コミュニケーション学科 准教授)

中村 徹 (小松川平井地区連合町会長)

新居 みどり (特定非営利活動法人 国際活動市民中心

C I N G A コーディネーター)

トータ サイスリーダー (清新プラザ自治会 役員)

鳥屋部 岳治 (王子マテリア株式会社 江戸川工場 事務部 部長)

篠原 克彦 (学校法人 滋慶学園 東洋言語学院 事務局長)

門田 信雄 (江戸川日本語ボランティア連絡会 代表)

辛 冠橋 (中国) (公募外国人区民)

劉 鋼 (中国) (公募外国人区民)

トーマス ビヌー (インド) (公募外国人区民)

グエン ティエン シー (ベトナム)
(公募外国人区民)

リザル ラジャン (ネパール)
(公募外国人区民)

宋 美永 (韓国) (公募外国人区民)

事務局

S D G s 推進部とともに生きるまち推進課

欠席者 澤田 陽子 (小岩駅前町会長)

傍聴者数 8名

議事要旨

1 開会

2 議事

(1) 事務局説明

- 生活オリエンテーション動画「江戸川区でともに暮らそう～多文化共生センター～」の視聴。
- 資料1「事務局説明資料」に沿って、江戸川区の多文化共生の取り組み状況について説明した。

[生活オリエンテーション動画 URL](#)

(2) 意見交換

日本語教育、生活相談、交流イベント、生活ルール・マナー、情報発信などについて、意見交換を行った。

(主な意見の内容)

〈委員A〉

・資料1「事務局説明資料」がなぜ和暦表記なのか。母国語が日本語であっても何年前かを比較するとわかりづらい。

⇒次回からの会議資料では、西暦も併記する。(事務局)

〈委員B〉

・江戸川区の多文化共生の取り組みの中に、AIやSNSを活用した案内や情報発信を行っているが、高齢の外国人たちは、スマートフォン等を上手に扱えない方もいると思う。

江戸川区には、高齢の外国人がどれくらい住んでいるのか。

⇒江戸川区に住む外国人の平均年齢は33歳と日本人に比べて圧倒的に若い。多文化共生センターへの相談ケースとしては少ないが、例えば東京アプリの申請や区の公式LINEの登録設定をお手伝いするような機会があった。(事務局)

〈委員C〉

・「えどがわ日本語クラス(前期)」の令和8年度の申し込み状況が、各定員30名に対して、葛西地区が135名、小岩地区が113名だが、決定方法は抽選か。

⇒参加者の選出は、応募者の日本語レベルチェックを実施し、日本語がゼロレベルで受講の必要性が高い方から順に決定している。結果、日本語レベルが低い方、少し話せるけれども、まだまだ生活するには困るような方が落選することもある。落選者には、地域のボランティア団体が運営する日本語教室やオンラインでの自学自習ツールのご紹介等の情報提供を行った。(事務局)

・ニーズを踏まえ、「えどがわ日本語クラス」の学習時間の拡大や他地域への拡大を検討と記載があるが、具体的な方向性は。

⇒これから事業内容を詰めていくところである。(事務局)

〈委員D〉

・区在住外国人全世帯に案内はがきを送ったというのは、とても驚いた。多くの外国人に知ってもらおうという取り組みは素晴らしい。

・外国人が地域で様々なイベントを実施しているので、そのようなイベントに出展して周知をしていくことも役に立つと思う。

⇒10月8日の「わがまち清新」というイベントに出展を予定している。また、区の地域まつりにも参加をして、多くの方々にPRをしていきたい。(事務局)

・多文化共生センターの相談員は日本人か。

⇒相談担当の職員は、現在2名おり、中国出身の職員と英語が堪能な日本人の職員が対応している。(事務局)

<委員E>

・「えどがわ日本語クラス」の実施会場は、実施する年によって変わるのか。実施会場が一定だと通いづらい方も出てくると思う。毎年同じ会場ではなくて、変えていったほうが良いと思う。

⇒今年度は、葛西区民館と葛西小・中学校、小岩区民館と小岩小学校で実施。次年度以降は未定だが、実施会場を増やしたい考えはある。(事務局)

<委員F>

・多文化共生センターへの主な相談内容と動画のテーマが連動していないように感じる。外国人が困らないようにするための動画に変えていくことは可能か。

⇒動画のテーマは、区全体として外国人が困っている内容を優先して作成している。多文化共生センターの相談実績も統計が取れ、傾向が見えてきているので、動画制作に活かしていきたい。

<委員G>

・今年度の「えどがわ日本語クラス」の運営を担当させていただいている。無料でこのような教室を実施した場合、継続受講率が下がってしまうことが多いが、80%を超えることは、なかなかないことだと思う。運営する立場としても、80%を目標にしていた。生活に関するシチュエーションや、受講内容をこだわったものにした結果だと受け止めている。

・日本語教室の開催がニーズに追いついていない理由のひとつとして、日本全体で日本語教師が足りていない。しかも「生活者の為の日本語」を教えられるとなると、さらに少ない。今後、日本語教師が徐々に増えていくと思うので、ニーズに合わせて我々も頑張っていきたい。

・「多文化共生のまちづくり」という大きな目標に対して、様々な取り組みをした結果、どのような影響があったのか、効果測定を行い、まとめる必要があると思う。数値的なものが出せると、「多文化共生のまちづくり」の基準が出来上がってくると思うので、都内で一番外国人が多い区として、先駆ける形で組み立ててはどうかと思っている。

<委員H>

・日本語が全くできない外国の方々にとって、ひらがなカタカナが読め、名前が書けるだけでもすごく助かると思う。多文化共生センターができたおかげで、私が運営している学校に通っている子どもたちや保護者に色々な情報を伝えることができた。

・日本語教室に通っている外国の方々は、仕事が見つかったら途中で来なくなってしまうことも多く、中途半端に終わってしまうケースもあると感じている。

・2週間前に母国で洪水があり、多くの人たちが被害に遭った。日本も自然災害が起きる国なので、「えどがわ日本語クラス」の授業の中で、避難の仕方や生活ルール・マナーも教えていけば、日本に住みやすくなるのではと思う。

<委員I>

・江戸川区がこのような外国人向けの施策を行っていることに驚いた。今年の4月から多文化共生センターとつながりができて、コミュニティ向けのイベントや清掃活動、防災訓練に声を掛けてもらい、本当に役に立っている。

・私が所属する南インドのコミュニティのおまつりがあり、500人程が集まる。例えば、チラシ

の配布やQRコードを作成し、情報を多くの方にお知らせする良い機会だと思うが。

⇒発信力の強い大きなコミュニティに伝えてもらうことは、非常に効果的だと考えている。
多文化共生センターの相談に来る外国人はインドの方が一番多い。(事務局)

【生活オリエンテーション動画「江戸川区でともに暮らそう～災害に備えよう～」の視聴】

＜委員G＞

- ・ハザードマップが区内全世帯に配布された際に、「逃げてください」「ここにはダメです」と書かれていたことに衝撃を受けた。
- ・「命を守る行動を取ってください」と言われた時に、日本人はみんな知っているのかと日本語学校に通う学生はみんな驚いていた。外国人はどうしたら良いかわからないと思う。
- ・運営する日本語学校では、避難所となる複数の学校を実際に歩いて確認している。これは、日本人も外国人も関係ないが、特に外国人は、近くの避難場所やそこまでの道を確認することが必要だと思う。
- ・防災情報はたくさんあるが、ハザードマップのような情報を外国人にしっかり伝えていければ、安心して生活できると思う。

＜会長＞

- ・色々な自治体で防災情報を見てきたが、ここまで立派な資料を作成している自治体は中々ないと思う。ハザードマップとマイタイムラインが一緒になっていて、非常にわかりやすい。
- ・防災は、日本人も外国人も関係ない。日本人と外国人と一緒に防災拠点まで街歩きをするとか、交流をしながら防災について学ぶ機会を拡充することも良いと思う。

＜委員I＞

- ・ハザードマップは外国人世帯にも送っているのか
⇒区内の全世帯にポスティングを実施した。(事務局)

＜委員D＞

- ・実際に地震が起こった時、資料を読むよりもアプリなどで自分がいる位置から一番安全な場所はどこかわかるようになれば、簡単でより分かりやすいと思う。

＜会長＞

- ・防災に対する意識はあってもなかなか資料を手にとらないと思う。どうしても災害は自分事として考えることが難しく、どこかで自分は大丈夫と思ってしまう。みんなで交流する中で資料を読むことがあると良いかもしれない。
- ・事務局説明の中で日本人との交流事業の話があった。インターナショナルスクールと公立小学校の交流会を実施したとのことだったが、実際にやってみてどうだったか。

＜委員H＞

- ・令和8年2月に交流会を実施した。日本と外国のそれぞれの授業の様子を知ることでき、遊び

や名刺交換を通して、英語、日本語で挨拶をした。子どもたちにとっては、勉強になる良い機会になったと思う。

- ・近隣の別の小学校の学校公開にも参加をする予定。お互いのことを知ってもらう機会があることは子どもたちにとっては、とても良い勉強になる。今後も交流を増やしていきたい。

- ・インターナショナルスクールに行かずに公立の小・中学校に入学する外国の子もいる。その保護者が日本語をうまく喋れないため、近隣の小学校の先生から依頼があり、通訳のサポートをした。交流の機会が増える良いきっかけになった。

⇒インターナショナルスクールの生徒は、日本に住んでいるのに日本の子どもたちと交流する機会がないということをよく聞く。交流事業に参加して、日本の子どもたちも英語が話せない中で、身振り手振りでコミュニケーションを取ろうという姿勢があった。言葉が通じなくても遊びを通じて、楽しそうに時間を過ごしていた。外国と日本のハイブリッドな子どもたちが、これからの多文化共生の社会を担っていくということでは、お互いが刺激になるような機会を増やしていきたい。(委員Hの)インターナショナルスクールも最初から地域に受け入れてもらった訳ではなく、クレームをいただくことも多かったと聞いている。自主的に地域の清掃活動から始めて、少しずつ地域に受け入れてもらえるような関係作りがあつてこそだと思う。(事務局)

<委員A>

- ・私自身が中国に長く住んでいたことは前回の会議で紹介したが、娘が上海の日本人学校に通っていた。全校生徒が約2千人と大きな日本人コミュニティだったが、頻繁に上海の小学生たちと交流会を行っていた。

- ・大人が段取りをしなくても、子どもたち同士で勝手に遊び出していた。国籍の違いや言葉の壁はそこにはないと実感した。

- ・この経験があるので、娘が日本に帰国してから中国バッシングがあることに対してとても悲しいと言いつけていた。中国に長く暮らしていたことをまわりの日本人に言いたくなかったし、中国に対するネガティブな会話がされた時に、「そんなことない」と言えるほどの勇気もなかった。でも否定はしたいという思いもあつて。すごく辛かったと言っていたのが印象的だった。

<委員H>

- ・日本で生活している以上は、日本の法律、生活に外国人側から慣れていく必要がある。私が経営しているインターナショナルスクールでは、日本語の授業を行っている。その中で日本のルールやマナーも教えている。そのうえで、相手の気持ちがわかれば、国籍に関係なくスムーズに地域に溶け込むことができると思う。

- ・電車で通学している生徒が、妊婦さんに席を譲った際に、学校にお礼のメールが来た。地域の清掃活動をしている際に、近所の方から「いつもありがとう」とお礼を言われた。このような経験は、その国の文化や習慣に自分を合わせていくうえで、とても大切なことだと思う。

<委員I>

- ・最近、インバウンドでたくさんの外国人が日本に訪れている。インド人にとっても日本は人気であり、多くのインド人が来日している。

- ・その理由のひとつとして、学校を経営しているインド人が、子どもたちを連れて日本の学校を

見学に来ている。日本の教育の様子がインドのテレビで放映されているので、実際に見学したいという需要がある。

- ・多文化共生センターに相談したところ、公立の学校を紹介してくれた。日本の学校教育の素晴らしさを海外に伝える良い機会だと思う。

- ・また、インドの事業者やエンジニアの方が、日本の企業を見学したいという声もある。

区内で受け入れてくれる企業があれば、日本の企業や江戸川区の素晴らしさを伝えられる良い機会だと思うので是非、相談に乗ってほしい。

<委員F>

- ・子どもたちの交流は大変素晴らしいと思うが、例えば、お父さんが日本人でお母さんが外国人の子どもたちが公立の学校にいっぱいいる。(インターナショナルスクールのような) 学校や国が違う子たちとの交流も良いが、もっとクラスの中にいる外国ルーツのある子たちとお互い学び合おうと積極的に働きかけていく必要があるのではないか。

- ・目に見える交流だけではなく、クラスの中には様々な人たちがいるっていう視点がまだ弱い部分があるのではないか。

- ・自分の名前がカタカナで嫌だとか、お母さんの名前が漢字で悲しい思いをしているとか、そのような相談がたくさん寄せられる。その子たちも江戸川区の子どもたちとして存在している。

- ・美しい交流も大切だけど、そこに出てこないたくさんの傷ついている子どもたちがいることを忘れてはいけない。そのためにどうしていくかを大人として考える必要があると思う。

<会長>

- ・日本や江戸川区の生活ルール・マナーに慣れるのに大変な部分があるか。

<委員H>

- ・私が来日したのは22年前で、その当時は、江戸川区もネパール人が少なかった。いつも会う方は、アルバイト先の日本人の方々。日本語を無理やり話していると間違いを指摘してくれて、日本語だけでなく、ルールやマナーを学ぶことができた。

- ・最近はネパール人が増えているため、ネパール人同士で固まってしまうことが多いと感じる。日本語でのコミュニケーションスキルも上がらないし、地域の日本人との交友関係もなくなってしまう。生活ルールもマナーもわからないままになってしまう。

<委員G>

- ・日本語学校でも日本のマナーを生徒に教えていく必要があると感じているが、たくさんの日本語学校がある中で、マナーをしっかり教えている学校は少ないと思う。

- ・学校は閉鎖的な世界で日本人の視点から学校を見ると、いろんな外国人がいてそこで何をやってるかわからない、奇妙だという印象を持たれてしまう。

- ・新しい日本語学校を建てた際に、近隣の地域住民向けに説明会を実施した。そこでは、学校への批判的な意見が噴出し、何度も説明会を開く等、対応にものすごく苦慮した。これは、約8年前の話で10年経っていない。

- ・日本人に限ったことではないが、よくわからないものが近くに来ることに対する恐怖があるの

だと思う。

- ・地域に認めてもらうために、清掃活動を毎日行い、学生たちにルールやマナーを徹底的に学ばせた。江戸川総合人生大学の方々にもご協力をいただいた。このような取り組みの姿を地域の方々に見てもらって少しずつ信頼を獲得していった。

- ・日本人側も外国人側も共生に向けて、一定の努力や理解をお互いにしなければならない。そのためには、地域に入っていく外国人側から動くことの大切さを身をもって感じた。

- ・これは、地域だけではなく、江戸川区、日本全体で共通する思う。

<副会長>

- ・日本人が外国人を理解する機会をもっと増やしてほしいと思う。年を取ると考え方が固くなってしまい、柔軟な考え方が衰えてきてしまう。

- ・私の住んでいる小松川は、昔と比べれば外国人が増えたと感じているが、普段その外国人と話をする機会はほとんどない。日常の中で日本人側から外国人を理解することは、なかなか難しいのではと感じている。

- ・だからこそ、逆に受け入れる日本人側から外国人のことを知ってもらうような機会があると良いと思う。

<委員 J>

- ・妻が「日本語ふれあいひろば」に通っている。学生一人ひとりに対して、ボランティアの日本語指導の方が手厚く教えてくれて、非常に勉強になっている。ボランティアの方々が運営しているので、難しいことは承知しているが、週に1回の授業では物足りなさを感じている。

- ・「えどがわ日本語クラス」も葛西と小岩だけでは、場所が行きづらい等の理由で参加したくても行けない方もいると思う。

- ・特に家族滞在の方々は、日本語の勉強をしたくても機会がないことが多い。区内の様々な場所で、日本語教室を増やしてほしい。

<委員 C>

- ・「日本語ふれあいひろば」を運営しているが、半年ほど新規の受入れをお断りしている。また、運営上やむを得ず子どもをお断りしている。この2点は非常に後ろめたいことだと思っている。

- ・ボランティア団体としては、日本語教育を受ける必要がある人の一部しか対応できていない。日本語教育が必要な外国人がどれだけいるのか、全体が見えない中でできることをやっているというのが現状の実態。

- ・江戸川区として、外国人に対する日本語教育が必要な外国人をトータル的に把握して、全体像を見据えながら事業を進めていく必要があると感じている。

5 その他

特になし。

6 閉会

<文責：事務局>